

スリーマイル - チェルノブイリ - カシワザキ

山口 幸夫（「柏崎刈羽・科学者の会」、原子力資料情報室・共同代表、物理学）

1. 班目発言の真意は？

- ・新潟県民の気持ちを無視した宮健三発言と班目春樹発言。
- ・原子炉圧力容器、内部構造物、主配管など重要危機などの調査はこれから。
- ・スリーマイル事故（1979）：炉内の温度は2500 度、炉心溶融はなし
6年後、2815 度、炉心の20%は溶融。
チェルノブイリ事故（1986）：死者31人 75人（ラブロック、2006）
将来ふくめて4000人（IAEA、WHOなど、2005）数百万人の子どもたちへ
継世代的影響（綿貫、吉田、2006）、ヨーロッパ全体で80万人か（今中、2006）。

2. 「柏崎刈羽原発の閉鎖を訴える科学者・技術者の会」

- ・事実の解明なしに再稼働の動き。
- ・閉鎖を訴える4つの根拠。
 - 再び大地震が起こる可能性。
 - 新・耐震設計指針の「十分な支持性能を持つ地盤」に違反。
 - 施設・機器に永久ひずみ、亀裂のおそれ。確認が困難。
 - 1974年以来の住民の訴え。最高裁で審議中。
- ・8月7日、「会」を呼びかけた石橋克彦・井野博満・田中三彦・山口幸夫、新潟県庁で記者会見。
8月21日、学士会館（東京）で記者会見。声明を発表。賛同した「科学者・技術者」は170人余（10月末日現在）。

3. 柏崎刈羽、「豆腐の上の」原発

- ・「原発予定地盤は劣悪 - 公開された資料の分析と我々の結論」（柏崎刈羽、原発反対守る会連合、柏崎原発反対同盟、1974.9）
- ・東京電力の設置許可申請書と政府の安全審査のまやかし。
- ・すすむ老朽化。
 - 1号機（22年）、2・5号機（17年）、3号機（14年）、4号機（13年）
 - 6号機（11年）、7号機（10年）

4. 原発は制御可能か？

- ・止まらない原発不正、柏崎刈羽で主な事故（1985～2006）は97件。
- ・行方さだまらぬ高レベル放射性廃棄物。

班目春樹氏は委員長として不適格 交代をもとめる

2007.7.31 原子力資料情報室 共同代表 山口幸夫、西尾漠、伴英幸

7月16日に起きた中越沖地震により被災された人々は大きな不安の中で避難生活を余儀なくされている。加えて、柏崎刈羽原発への不安も高まっている。報道によればアンケートの結果は、一番の不安要因が柏崎刈羽原発だと伝えている。このことは、ヨウ素剤を子供たちに飲ませた人たちがいること、東京電力（東電）の発表が信頼できないといった声からも裏付けられる。

同原発を視察したところ発電所施設のいたるところで、道路は大きく波打っていた。また、そこかしこに道路の陥没あるいはその補修後が見られた。6号機建屋前のろ過水タンク（1000kリットル）はほぼ全周囲にわたって挫折していた。

東電の発表した資料によっても柏崎刈羽原発の被害はすざましいものがある。6号機天井のクレーンの駆動機構軸のジョイントが折れた。号機によってばらつきはあるが、今回の地震動はすべての号機でS2を上回る加速度が観測されている（基礎版上）。とりわけ1号機では2.5倍の680ガルという値が記録されている。また、7月30日に東京電力が発表した最大加速度の応答値比較ではタービン建屋1階（ペデスタル）において設計時の最大加速度の応答値を1号機では7倍を超え、3号機では約2.5倍の2058ガルを観測している。

地元の人たちはこのような「想定外」の揺れを被った原発は二度と動かすことのないように願っている。

このような状況の中で貴院は「中越沖地震における原子力施設に関する調査・対策委員会（仮称）」を設置することを決め、「具体的な影響についての事実関係の調査を行うとともに」、「国及び事業者の今後の課題と対策を」取りまとめるという。そして、班目春樹氏を委員長に20名の委員を選出し、第1回の会合を31日に開催する。

原子力安全・保安院の立場は原子力の安全を確保することであり、このことは、現状で確保できない場合には耐震安全向上の対策を、それでも確保できない場合には原子炉の閉鎖を求めるという立場であることを意味する。

ところが、班目委員長は、想定外の揺れにB,Cクラスは壊れても仕方がない、Aクラスは壊れず原子力の安全は確保されていると早々と安全宣言をしている。さらに、1~2年で運転再開ができるような見通しを繰り返しコメントしている。まだ、格納容器内部を見ていない段階で、このような発言をすることは学者としての倫理を疑わざるをえない。氏のこのような発言から、設置される委員会すらもお座なりな調査・対策しか行えないとの批判を免れないだろう。

言うまでもなく、今回の揺れは弾性変形の上限であるS1を大きく超え、塑性変形を許容しているS2をも大きく上回る揺れが観測されている。外観上は影響がないように見えても、安全を脅かすひずみは残っている危険性があり、これをどのように確認するかが最大の問題である。これを調べつくことが最大の問題である。にもかかわらず、調査の前に安全が確保されているなどと発言することは言語道断である。

以上の理由から班目氏は委員長として不適格であり交代を求める。

なお、参考として、不適格であることを示す同氏のこれまでの発言録を添付した。

『六ヶ所村ラブソディ』 斑目春樹教授発言

技術の方はですね、とにかく分かんないけれどもやってみようが、どうしてもあります。で、だめ、危ない、となったら、ちょっとでもその兆候があったら、そこで手を打とうと。おそろおそろですよ。

原子力もそうなんですな。

原子力もそういうところ絶対あります。

だって、例えばですね、原子力発電所を設計した時には、応力腐食割れ、SCCなんてのは知らなかったんです。

だけど、あの、まだいろんなそういうわかんないことがあるから、あの、えーと、安全率っていうかですね、余裕をたーくさんもって、でその余裕に収まるだろうなーと思って始めてるわけですよ。

そしたら、SCCが出てきちゃった。

で、チェックしてみたら、まあこれはこのへんなんか収まって良かった、良かった。

今まで、良かった良かったで、きてます。

ただし、良かったじゃないシナリオもあるでしょうねって言われると思うんですよ。

その時は、原子力発電所止まっちゃいますね。

原子力発電に対して、安心する日なんかきませんよ。

せめて信頼して欲しいと思いますけど。

安心なんかできるわけじゃないじゃないですか、あんな不気味なの。

核廃棄物の最終処分をすることに技術的な問題はなくても、そこを受け入れる場所が…なければ、今、困っちゃいますもん。

ないですよ、探せても、イギリスまで…うん、ないですよ。

それは、大きな問題じゃないですか。

え、いや、だから、あのー、えーと、基本的に、その何ていうのかな、今の路線で、今の路線がほんとに正しいかどうかは別として、今の路線かなんかで、替えがあるだろうと思ってるわけですよ。

というのは、最後の処分地の話は、最後は結局お金でしょ。

あの、どうしても、その、えーと、みんなが受け入れてくれないっていうんだったら、じゃ、

おたくには、今までこれこれっていったけど2倍払いましょ。それでも手を挙げないんだったら、5倍払いましょ。10倍払いましょ。どっかで国民が納得することができますよ。

それは、経済的インセンティブと、その…あの、処理費なんてたかが知れているから、えー、たぶん、その、齟齬は来さないですね。

今、たしか、最終処分地を受け入れてくれるボーリング調査させてくれるだけで…

すごいお金流してますね。

20億円ですよ。

あれがたかが知れてるらしいですよ、あの世界は。

そうなんですか。

原子力発電所って、ものすごい儲かっているんでしょうね、きっとね。

そりゃそうですよ、原子力発電所1日止めると、1億どころじゃないわけですよ。

だから、そういう意味からいくと、今動いている原子力発電所をつぶす気なんてアメリカ毛頭ないし、日本も電力会社、あるものはあるもの、できる限り使いたいというのがこれが本当、本音ですよ。

浜岡原発での班目証言

事故・トラブルについて、制御棒落下事故が明らかになる前に、「これは、かなりの知見が蓄積されています。したがって、これから先、新しい知見が出てくることはないとは、やっぱり思いません。これから先も、新しい知見は出てくると思いますが、ただ、大きな知見については、もう、大体出たのではないかなというのが、実は、私の、これは個人的な考えです。」(第13回班目主尋問114項)と述べている

制御棒の2本以上の同時の落下について、「起きるとは、ちょっと私には思えません。どういうふうなことを考えるんですか。それに似たような事象があったら、教えてください。」(班目反対尋問109-112項)

「非常用ディーゼルが2台動かなくても、通常運転中だったら何も起きません。ですから非常用ディーゼルが2台同時に壊れて、いろいろな問題が起こるためには、そのほかにもあれも起こる、これも起こる、あれも起こる、これも起こると、仮定の上に何個も重ねて、初めて大事故に至るわけです。だからそういうときに、非常用ディーゼル2個の破断も考えましょう、こう考えましょうと言っていると、設計ができなくなっちゃうんですよ。つまり何でもかんでも、これも可能性ちょっとある、これはちょっと可能性がある、そういうものを全部組み合わせていったら、ものなんて絶対造れません。だからどっかでは割り切るんです。」

問い「どっかで割り切るということは、ものを造るために、この程度を考慮すれば造ってもいいだろうという感じですね。」

答え「そのとおりです。」

問い「非常用ディーゼル発電機2台が同時に動かないということは、それ自体は、地震が発生したときに、非常用ディーゼル発電機に寄り掛かっている、動かさなくちゃいけないものが止まってしまうということがあり得るわけですか

ら、非常用発電機2台が同時に動かないという事態自体は、大きな問題ではないですか。」

答え「非常用ディーゼル発電機2台が動かないという事例が発見された場合には、多分、保安院にも特別委員会ができて、この問題について

真剣に考え出します。事例があったら教えてください。ですからそれが重要な事態だということとは認めます。」

問い「重要な事態であれば、非常用発電機2台が同時に止まったときに、ほかに何か、別の重要な事態が加わって、それで事故が発生するというのは、幾つか想定しなくてはいけないことではないんですか。先ほどから証人は、それに加えるのは小さなこと小さなことを加えなさいやいけないから大変だと言って、ここは割り切るとおっしゃっていますけれども、足す別の重大な事象ということが、大きいことがあり得るんだということは、お認めにはならない。」

答え「我々、ある意味では非常に謙虚です。こういう事態とこういう事態とこういう事態の重ね合わせくらいは考えたほうがいいかなということについては、聞く耳を持っています。是非こういうことについては考えてほしい、それはなるほど問題視したほうがいいということだったら、当然、国の方でもそういうことについて審議を始めます。聞く耳を持たないという態度ではないんです。ただ今みたいに抽象的に、あれも起こって、これも起こって、これも起こって、だから地震だったら大変なことになるんだからという、抽象的なことを言われた場合には、お答えのしようがありません。」(第17回班目反対尋問224~228項)